

論文

障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム評価尺度の作成

Development and Validation of the Outcome Evaluation Scale
for Educational Adapted Sports Programs

岡田美優¹⁾, 醍醐笑部²⁾, 木村和彦³⁾, 作野誠一³⁾

¹⁾ 早稲田大学スポーツ科学研究科博士課程

²⁾ 筑波大学体育系

³⁾ 早稲田大学スポーツ科学学術院

キーワード: 障害者スポーツ教育プログラム, アウトカム評価, 尺度開発, 障害者スポーツ
Key words: educational adapted sports program, outcome evaluation, program evaluation,
scale development, adapted sports,

【抄録】

本研究では、車いすバスケットボールを題材とした障害者スポーツ教育プログラム(以下、障スポ教育プログラム)が参加者にどのような影響を与えているかという問いに対し、社会的インパクト評価の研究で評価対象となるアウトカムに着目し、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム評価尺度の作成と信頼性・妥当性の検討を目的とする。

まず障害者スポーツ教育プログラムで作成したフィールドノーツをもとにインタビューガイドを作成し、障害者スポーツ教育プログラムの関係者5名に対しインタビュー調査を実施した。次に、インタビューで得られたデータや先行研究をもとに尺度作成を行った。測定尺度は、大きく「障害者に関するアウトカム」と「障害者スポーツに関するアウトカム」の2つに分かれ、それぞれ12項目と10項目の合計22項目で構成された。作成した尺度を用いて関東圏内の小中学校6校に在籍する生徒887名を対象に質問紙調査を行い、得られたデータを分析することで尺度の妥当性の検討を行った。

項目分析の結果、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定する尺度は13項目となった。残った13項目には一定の妥当性と信頼性が確認され、収束的妥当性及び弁別的妥当性も示された。因子分析の結果、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム尺度のうち、「障害者に関するアウトカム」は2因子構造となり、「障害者スポーツに関するアウトカム」は1因子構造となった。本研究では、先行研究で扱われている項目とは異なる独自の項目が抽出される結果となったが、こうした項目はプログラムを実際に運営し参加者と直接関わりをもつ者のインタビュー調査から作成されており、プログラム実施後すぐに実感できる直接的なアウトカムに関する項目や、よりプログラム参加者の実態に沿った内容の項目が抽出されたと考えられる。削除された項目に関しては、小中学生にとっては曖昧で答えづらい質問項目になっていたことや、規範意識からほとんどの回答者がポジティブな回答をしたことにより回答に偏りがでてしまったことが要因として考察された。

スポーツ科学研究, 20, 39-59, 2023 年, 受付日:2022 年 9 月 6 日, 受理日:2023 年 4 月 26 日

連絡先: 岡田美優 早稲田大学 202-0021 西東京市東伏見 2-7-5

ghbpm@toki.waseda.jp

I. 緒言

2002 年に策定された障害者基本計画において、障害の有無に関わらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う「共生社会」の実現が重要な課題として提示された。しかし、2016(平成 28)年 7 月 26 日に神奈川県相模原市の障害者支援施設「津久井やまゆり園」に、施設の元職員の男性が障害者を殺傷する事件が起こるなど、障害者に対する差別・偏見によって障害者の人格と個性

が侵害されている実情が伺える。また、内閣府が 2017(平成 29)年に行った国勢調査によると、調査対象者全体(n=1,771)のうち 83.9%の回答者が障害者に対する差別・偏見の存在を認知していることが明らかとなっている。障害者に対する差別・偏見の意識は、障害者に対するネガティブな感情反応を引き起こし、障害者に対する援助行動を抑制する一要因となっているといわれており(Weiner et al,1988),障害者と共に支え合う共生

社会の実現には、障害者に対する差別・偏見など、障害者と支え合う行為を抑制する要因を解消する施策を行っていくことが求められる。

障害者に対する差別・偏見等を解消し共生社会の実現を目指すための施策の一つとして、ここ数年で障害者スポーツを通じた教育・啓発活動が全国各地で推進されている。2013年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、東京大会)の開催が決定して以降、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会は、障害者スポーツのもつ教育的な価値を含めたオリンピック・パラリンピックの価値を世の中に提供するため、障害者スポーツ等を題材としたオリンピック・パラリンピック教育(以下、オリパラ教育)を推進してきた。オリパラ教育とは、障害者スポーツの体験や障害当事者とのスポーツを通じた交流等による学習を国内の公立学校で実施する取り組みであり(文部科学省,2016)、特に障害者スポーツを題材とした教育プログラム(以下、障害者スポーツ教育プログラム)に関しては障害者に対する理解や共生社会に対する理解促進が期待されている(矢島ら,2021a)。オリパラ教育の活動に対し、東京都は2014年度から2020年度までの間に、オリパラ教育推進事業に対して7年間の総額でおよそ130億円の予算を組み、千葉県は2017年度から2020年度の間に総額で4,690万円の予算を組んでいる。千葉市においては、2017年度からオリパラ教育推進事業の予算が組みまれており、2020年度までに総額およそ1.2億円を計上している。

一方、こうした障害者差別・偏見に対する教育的介入においては、障害者差別・偏見を助長してしまう危険性や、有効性に対する懐疑的な見解があることがわかっている。例えば、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒同士が交流する「交流及び共同学習」の授業は障害や違いを強調し、自然な人間関係にならないといった意見が寄せられている(文部科学省 HP)。また、車椅子に乗る・アイマスクをするなどの障害疑似体験の実施により、障害者個人の課題にばかり焦点が当たり、社会的構造や周囲の環境による課題が見過ごされてしまう可能性があるという指摘する声もある(Scullion,1996)。障害者スポーツ教育プログラムにおいても、プログラム実施校に対し行った調査によると、障害者理解・共生社会への理解に対する成果が期待以上に実感できていないことが実証されている(矢島ら,2021b)。そのため、障害者との共生を実現することを目的としている障害者スポーツ教育プログラムにおいてもプログラム評価を行い、その効果性(アウトカム)を実証し、科学的根拠ないしエビデンスに基づく施策として推進される必要がある。

II. 先行研究の検討

障害者スポーツプログラムのアウトカムを評価する研究については、主に障害者スポーツの大会や授業、体験イベントを対象とし、プログラムのアウトカムを評価した研究が散見される。例えば、障害者スポーツの大会プログラムについて、植木(2007)、藤田(2015)、Paradis, et al.(2017)は、障害者スポーツの大会がボランティアの障害者に対する意識に及ぼす効果について調査を行い、大会参加前後で障害者に対する意識がポジティブに変化したことを明らかにしている。そのほかにも、安井(2004)、和久田・石塚(2004)、内田・大谷(2013)、小野ら(2015)、津々木ら(2015)角田ら(2018)は、障害者スポーツの大会やイベント、教室等のプログラムが参加者に及ぼす影響に関する調査を行っている。これらの研究成果により、障害者スポーツの観戦や選手との交流、映像の視聴やボランティア活動など、障害者スポーツを通じた障害者と健常者との交流が、障害者に対する意識・態度の変化に一定の有効性を示すことが明らかになっている。

しかし、これらの研究内容を詳細に確認したところ、質問紙調査におけるサンプルの数や、評価尺度の妥当性・信頼性、評価方法の客観性など、研究方法や測定尺度の選定・開発における課題があることが伺えた。宮本・宇井(2014a)は、心理的尺度を用いた調査について、他の研究者によって作成された既存の尺度を用いる場合には、尺度が捉えようとしている心理的特徴、構成概念を理解したうえで、尺度の信頼性と妥当性が十分に検討されているか確認する必要があると述べている。また、新たに心理的尺度を開発する際にも、構成概念の設定や、尺度の信頼性と妥当性を検討することの必要性が指摘されている(宮本・宇井, 2014b)。

以上のことから、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを評価する信頼性・妥当性の確認された尺度の開発と、アウトカム評価手法に関しては、今後さらなる検討の余地があると思われる。よって、障害者スポーツ教育プログラムの評価に際しても、まずは信頼性・妥当性が十分に検討された評価尺度を開発することが課題であるといえよう。

III. 研究目的

これまでの社会的・学術的背景から、本研究では①障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定する尺度を作成すること、②測定尺度の信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

IV. 研究方法

本研究では、混合研究法 (mixed method research) の一つである量的手段 (調査票) 開発のための質的探求という手法を用いた Myers & Oetzel (2003) と高松・山口 (2015; 2015) の研究を参考に、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム尺度を作成する。Myers & Oetzel (2003) は、ある組織へ新入社員が同化していくディメンションを測定するための尺度を作成するために、質的・量的データどちらも収集・分析し尺度の作成と妥当性の検証を行なっている。高松・山口 (2015) は、高校野球における監督のコンピテンシー尺度を作成するため、Myers & Oetzel (2003) と同様に質的・量的データを収集・分析し、尺度の信頼性と妥当性の検証を行っている。本研究では、上記の研究を参考に、大きく2つの STEP に分けて調査を行う。

STEP1 (予備調査) では、障害者スポーツ教育プログラムに関する学術論文やオンラインデータ、関係者に対するインタビューデータなどの質的データを収集・分析し障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを構成する概念を抽出する。STEP2 (本調査) として、抽出された構成概念をもとに障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定するための調査票を作成し、作成した調査票を用いて質問紙調査を実施し、尺度の信頼性・妥当性を検討する。

V. 予備調査

予備調査はフィールドワークと文献調査、インタビューに寄って構成され、2019年3月から8月にかけて実施した。詳細は以下のとおりである。

1. フィールドワーク

実際に障害者スポーツ教育プログラムの参加者の反応や表情等を見て、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムについて仮説を立てるため、複数の障害者スポーツ教育プログラムの現場でフィールドワークを行った。フィールドワークの際に、プログラムの構成、参加者の反応や発言、スタッフや講師である選手の行動などから気づいたことを書き留め、フィールドノーツを作成した。フィールドノーツとは、調査地で見聞きしたことについてのメモや記録 (を集積したもの) であり、現場における体験について考察し分析するための手段であるといわれている (佐藤, 2006)。フィールドワークを行った結果、参加者の反応等から障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに該当しそうなキーワードをいくつか抽出することができた。それらのキーワードと Myers & Oetzel (2003) が作成したインタビュー調査項目を参考に、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関するインタビューの調査項目およびインタビューガイド作成し、インタビューの回答者が回答に困ったときの例示として用いることとした。フィールドノーツの結果の一部は表 (1) の通りで、作成したインタビューガイドは巻末資料に掲載した。

表1 フィールドノーツの一部

タイムライン	内容	メモ
13:10	始めの挨拶	スタッフが司会を務め、選手がそれぞれ自己紹介をする
13:15	日常車と競技車の違いについて	1人の選手が説明し、もう1人の選手が乗っている日常用車椅子と、スタッフが持ってる競技用車いすの違いをクイズ形式で紹介。生徒さんは積極的に発言していた。
13:20	車いすバスケのルールについて	トラベリング・ダブルドリブル・持ち点について説明
13:25	選手の車いすバスケ実演	選手のアップ ランパスからの2対1 (司会の人 が適宜説明をする)
13:40	リレー体験 (2回)	8-10名ほどのグループに分かれてリレー競争。司会の男性が乗り方や危ないポイントの説明をする。リレーの進め方は選手が実演しやってみせていた。
14:05	休憩	休憩中も選手に話しかける人がいた。先生も車いすに乗ってシュートを打つ練習をしていた。選手や、競技用車いすに興味関心が高まっている様子が見えた。
14:10	5vs5 (4回/5人)	生徒5名+選手1名 (シュートなし) で5対5のミニゲームを行う。最後には先生も入れて10人vs2人で勝負。車いすバスケットボールを純粋にスポーツとして楽しんでいるように思えた。
14:45	質疑応答	なぜ車いすバスケを始めたのか、日常生活で辛かったことは何か、彼女はいるのか、年齢はいつか、先生の中でタイプの人はいらぬのか。などプライベートに関する質問が多かった。選手の内面や普段の生活にかなり興味を持っている様子。
15:00	写真撮影	生徒が選手と一緒に近くでポーズをとるなど、打ち解けている様子だった。

2. 文献調査

障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを構成する概念を抽出するために、先行研究の資料分析を行った(高松・山口, 2015)。まず、国内の主要オンラインデータベースであるCiNii(Articles)と J-Stage を用いて、「障害者スポーツ」に「プログラム」「体験」「交流」などの障害者スポーツ教育プログラムに関連があると思われる学術論文(報告書や学会抄録は除く)を検索し、そ

の中から障害者スポーツプログラムのアウトカムを測定している調査項目を収集した。その後、補足的にウェブ上で閲覧可能な障害者スポーツ体験事業の実施報告などのオンラインデータを収集・分析し、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関するキーワードを抽出した。先行研究の資料分析により抽出された調査項目とオンラインデータの分析結果の一部は、以下の表2, 3に示している通りである。

表2 先行研究の資料分析の結果(一部)

先行研究	調査項目	先行研究での因子名	ラベル
安井 (2004)	かわいそうな人	障害者に対するイメージ	障害者に対する感情
	暗い感じ	障害者に対するイメージ	障害者に対する感情
	元気がない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	生活が困難	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	ひとりでは何もできない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	一緒に生活するのは難しい	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害者ではなくてよかった	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	自分と違わない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害は気にならない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	おもしろい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する感情
	楽しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する感情
	安全	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
	健康的	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
	苦しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
	激しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
	ルールが難しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
	車いすを動かすのが難しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知
ボールを使うのが難しい	車いすバスケットボールに対するイメージ	障害者スポーツに対する認知	
李ら (2011)	近寄りがたいと思う	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	常に他者の介助が必要だと思う	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	我慢強いと思う	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	障害がない人と変わらないと思う	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	障害者の立場になって考えようと思う	障害者に対する意識	障害者に対する行動意図
	困っている障害者に声をかけたり手助けしようと思う	障害者に対する意識	障害者に対する行動意図
藤田 (2016)	障害のある人はかわいそうな人だ	障害者に対する意識	障害者に対する感情
	障害のある人は障害のない人と同様な生活は難しい	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	障害のある人を理解することは難しい	障害者に対する意識	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人の身体能力は障害のない人より劣っている	障害者に対する意識	障害者に対する認知
	障害のある人がスポーツを楽しむことは難しい	障害者スポーツに対する意識	障害者に対する認知
	障害者スポーツは特別なスポーツである	障害者スポーツに対する意識	障害者スポーツに対する認知
	障害者スポーツは見るスポーツとしては面白くない	障害者スポーツに対する意識	障害者スポーツに対する認知

	障害のない人のスポーツと比べて障害者スポーツではそれほど技術は必要ない	障害者スポーツに対する意識	障害者スポーツに対する認知
	パラリンピックはオリンピックと比べるとレベルが低い	障害者スポーツに対する意識	障害者スポーツに対する認知
	障害のある人はかわいそうな人だ	障害者に対するイメージ	障害者に対する感情
	障害のある人は暗い	障害者に対するイメージ	障害者に対する感情
	障害のある人は自分たちとは違う	障害者に対するイメージ	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人は生活するのが大変	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害のある人の暮らしは質素だ	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害を理由とした差別は仕方ない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害のある人と歩くのは恥ずかしい	障害者に対するイメージ	障害者に対する感情
	障害の有無は友達になるのに関係ない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害の有無に関係なく支え合って生活すべき	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
	障害の有無は結婚に関係ない	障害者に対するイメージ	障害者に対する認知
小野ら (2015)	障害のある人と仕事をしてみたい	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する行動意図
	障害のある人は、超能力をもっているわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人にも気軽に声をかけられる	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人は、障害のない人よりも、いろいろな感覚が優れているわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人は、決して自分の境遇に甘えているわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のあるほとんどの人が、人並み以上にすぐれた芸術的才能を持っているわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人は、他人に対して親切である	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人が困っているとき、迷わず援助できる	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害がある人と一緒に楽しく生活することができる	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害がある人は、障害がない人よりも、忍耐力があるわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人も自分と同じ世界に生きている	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人ともコミュニケーションをとれる	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人は、援助がなくても多くのことができる	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人は、他の人が何を考えているのかを敏感に感じとれるわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人は、いろいろなことに希望を持っている	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知
	障害のある人に対して、変な遠慮はしない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する心理的障壁
	障害のある人と友人になりたい	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する行動意図
	障害のある人は、話し相手の性格や心の中を理解する特別な能力をもっているわけではない	障害児・者に対する多次元的態度	障害者に対する認知

表3 オンラインデータの分析結果(一部)

イベント名	直接アウトカム	ラベル
パラリング	障害者についての理解が深まる	障害者に対する認知
ココロをバリアフリーにするパラアスリート交流授業	様々な障害への理解や考えが深まる	障害に対する認知
パラリング	アスリートの凄さを感じる	障害に対する認知
~車いすバスケットボールエキシビジョンマッチ&体験会~	障害者に対する理解が深まる	障害に対する認知
~車いすバスケットボールエキシビジョンマッチ&体験会~	競技観戦しに行く人が増える	障害者スポーツに対する行動意図
東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた 2 年前イベント「夏休み親子パラリンピック競技体験会」	競技を観戦しに行く人が増える	障害者スポーツに対する行動意図
いすばすプロジェクト	障害者スポーツを支えるサポーターになりたいと思う	障害者スポーツに対する行動意図
いすばすプロジェクト	また参加したいという子供たちの声	障害者スポーツに対する行動意図
SPORTS × ART 2018 新豊洲スポーツパーク	障害者スポーツの魅力を発信する	障害者スポーツに対する認知
NO LIMITS CHALLENGE	障害者との間にある壁を取り払う	障害者に対する心理的障壁
三菱 going up キャンペーン for school	誰もが持てる力を発揮し活躍できることを知る	多様性の受容
Sports for All バスケットボール	競技の楽しさを感じる	障害者スポーツに対する感情
障害者スポーツフェスティバル	障害者スポーツの面白さを感じる	障害者スポーツに対する感情
SPORTS × ART 2020 新豊洲スポーツパーク	障害者スポーツへの興味・関心が高まる	障害者スポーツに対する感情
カナダ男子代表チームによる車いすバスケットボール体験会	障害者スポーツに対する興味・関心が高まる	障害者スポーツに対する感情
パラスポーツフェスタ in 新宿コズミックセンター	障害者スポーツを身近に感じる	障害者スポーツに対する感情
パラスポーツフェスタ 2016	障害者スポーツへの興味喚起	障害者スポーツに対する感情
いすばすプロジェクト	障害者スポーツへの興味がわく	障害者スポーツに対する感情
パラスポーツフェスタ 2018	障害者スポーツの認知拡大	障害者スポーツに対する認知
いすばすプロジェクト	障害者スポーツの魅力が伝わる	障害者スポーツに対する認知
三菱 going up キャンペーン 全国キャラバン	障害者スポーツの魅力を感じる	障害者スポーツに対する認知
SPORTS × ART 2019 新豊洲スポーツパーク	障害者スポーツの理解が進む	障害者スポーツに対する認知
カナダ男子代表チームによる車いすバスケットボール体験会	障害者スポーツの理解が進む	障害者スポーツに対する認知
第 2 回 障がい者スポーツ応援フェア	障害者スポーツへの理解促進	障害者スポーツに対する認知
パラスポーツフェスタ 2017	障害者スポーツへの理解促進	障害者スポーツに対する認知
パラリング	障害者を支えるサポーターが増える	障害者に対する行動意図

3. インタビュー調査

1) 調査対象

障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定するにあたって、「実施主体や国が目指している目的が果たされているのか」という問いに答えるため、あくまで実施側の望む成果(アウトカム)が測定できる尺度を作成する必要がある。よって、調査対象は参加者ではなくプログラムを実施する側の人物とした。研究者と関係性がある者のなかで、

障害者スポーツ教育プログラムの運営に複数回関わっている者に声をかけ、その中で調査協力を承諾してくれた5名を調査対象とした。調査対象者の基本情報は、以下の表(4)の通りである。インタビュー調査は、個別の対面形式で1人あたり40~60分程度行った。調査の際にはインタビューの目的や趣旨を伝え、録音の許可を得たうえで実施した。

表4 インタビュー対象者の基本情報

対象者	所属	性別	障害について	プログラムとの関わり
A	一般社団法人	男性	なし	プログラム企画・運営・司会
B	東京都の車いす バスケットボールチーム	男性	脊椎損傷(中途障害)	講師(選手)
C	東京都の車いす バスケットボールチーム	男性	二分脊椎(先天性)	講師(選手)
D	千葉県の車いす バスケットボールチーム	男性	片足切断(中途障害)	講師(選手)
E	東京都の車いす バスケットボールチーム	男性	小児がんの転移 (中途障害)	講師(選手)

2) 調査項目

半構造化インタビューによって、個人的属性(所属・性別・障害の有無及び障害の種類・障害者スポーツ教育プログラムとの関わり)、障害者スポーツ(車いすバスケットボール)教育プログラムが参加者に与えている影響や効果について尋ねた。では、「体験プログラムを行う中で、障害者スポーツプログラムが参加者にどのような変化をもたらしていると思いますか？あるいは、どのようなことを感じ、学んでいると思いますか？」「教師やプログラムに協力してくれたその他の人々を含み、プログラム参加者からプログラム参加後しばらく経過後に何か変化があったなどの連絡が来ることはありますか？」といった質問項目を設定した。回答が抽象的であった場合には、具体的な場面やエピソードを語ってもらうよう促した。

3) 主題分析

インタビューによって得られた音声データはすべてテキスト化された。そして、テキスト化された言語データの中から障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを示すと思われるすべての箇所にアンダーラインを引き、その箇所を表す主題を書き留める主題分析を行った(高松・山口, 2015)(表5)。主題分析で得られた障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関する主題分析の所見と、先ほどの文献調査で抽出されたキーワードをもとに、キーワードを大まかな群にラベリングした。その際には、障害者スポーツ教育プログラムで複数回講師を務めたことのある選手3名とともにKJ法(川喜田, 1967)によって段階的に分類しラベルづけを行った。類似する概念をグループ化する過程では、小グループ化、大グループ化という順序でグループ分けを行い、ラベルをつけていった。その後、スポーツ経営学を専門とする教員2名と大学院生6名によって、グループ化された内容やラベル名が正しく反映されているかをディスカッションにより検討した。

表 5 主題分析の例

対象	インタビューのテキストデータ	分析所見	ラベル(小)	ラベル(大)
イベント主催者 (一般社団法人) T氏	子供達にとっては、そのスポーツ見ることによって、全然、なんかその「障害持ってたけどすごかった」て言うよりは純粋に「 <u>カッコいいスポーツ</u> 」「 <u>こういうスポーツあるんだ</u> 」っていうのを知ることにはなっていると思って。体験会はね。で、あとまあ講演会とかデモンストレーションとかも見ててそう思うかな、すごく。だから、別に障害持ってて、でそこに対しての意識の変化が起きてすごかった、っていうよりは、小学生とかは、 <u>純粋に「スポーツ選手ってカッコいいな</u> 」っていう。そこが多分根強いかなと思って	障害者スポーツを見てもらうことで、純粋にスポーツ選手に対する好意的な感情が生まれる	障害者アスリートに対する好意	障害者アスリートに対する感情
	一つのスポーツとして見てくれている人が多いかなっていう感じかなあ	車いすバスケットを一つのスポーツとして捉える	障害者スポーツのスポーツ視	障害者スポーツの魅力認知
	驚きと、あとカッコいい、っていうまあ憧れの部分かなあ。でも知識がそこまでないから、ベースがないっていうか、多分、普通のスポーツ選手が来るのと多分そんなに変わらないと思う。知名度がすごく低いからねー、 <u>マイナススポーツの選手が来たっていう感覚</u> なのかなあ。未体験のスポーツっていう。	選手に対し、驚きや格好いいなど、ポジティブなイメージを持つ。	障害者アスリートに対するポジティブなイメージ	障害者アスリートに対する感情
	驚きと、あとカッコいい、っていうまあ憧れの部分かなあ。でも知識がそこまでないから、ベースがないっていうか、多分、普通のスポーツ選手が来るのと多分そんなに変わらないと思う。知名度がすごく低いからねー、 <u>マイナススポーツの選手が来たっていう感覚</u> なのかなあ。未体験のスポーツっていう。	障害者アスリートというよりは、マイナススポーツのアスリートとしてその人を捉える。	障害者アスリートのアスリート視	障害者アスリートに対する認知
	学びの面では・・どうか、感情とかでわかったというのは、中学生でも少ないのかもしれない。そもそもの先入観がないから、自分が足無くなるとか、車椅子になるとか、腕なくなるとか考えたことが多分ない人が、それはどの属性も圧倒的に多いと思うから・・。 だけど接点は間違いなくあって、それまで知らなかったから、 <u>あ、こういうことが大変だったんだ、っていう気づきには間違いなくあるかな。</u>	これまで気づけなかった障害者の困りごと	障害者の困りごと認知	障害者に対する認知
	自分が知ることができたから、 <u>例えば周りにそういう人たちがいた、障害のある人たちがいたときに気づけるし、こういうスポーツあったよーとかっていう話しはできるよ</u> ね。そこがすごい大きな役割果たせるんじゃないかなって。	身近な障害者の存在に気づく	障害者に対する認知	障害者に対する認知
	自分が知ることができたから、 <u>例えば周りにそういう人たちがいた、障害のある人たちがいたときに気づけるし、こういうスポーツあったよーとかっていう話しはできるよ</u> ね。そこがすごい大きな役割果たせるんじゃないかなって。	障害のある人に出会った時に障害者スポーツの存在を伝える意向を示す	他者推奨意図	障害者スポーツに対する行動意図
	もっというんなことができるんだとか。これとか面白いよね。「 <u>S選手は足が不自由なのに、ほんのちよつとの工夫でいるんなことができるなんて驚きました。</u> 」とか。なんかその、 <u>できないと思っただけど工夫することが大事</u> とか思ったりとか。で、あとは、わたしはS選手の話聞いて今日から洗濯物とか手伝いたいです。」とか、「今日はS選手の話聞いて、 <u>友達が失敗したときは励ますことが大事</u> だと思った。」「 <u>車いすの選手</u> かっよかった。」とか。「今日はありがとうございました、 <u>車いすでもバスケットができることが分かった。</u> 」とか。もしかしたらやっぱちっちゃい子たちの方が、「 <u>足がなかったらできない</u> 」っていう先入観があって、 <u>けどもそれをうまくうちの選手たちがひっくり返してもらってるから、僕たちも工夫すればできるんだ</u> とか、っていうのが今1年生のとか見てると思うかな。でもやっぱ選手一人一人話の得意なテーマが違うかなあ	工夫をすれば障害者にもできることがあると知る	障害者とともに生きられる可能性に気づく	障害者に対する認知
	もっというんなことができるんだとか。これとか面白いよね。「 <u>S選手は足が不自由なのに、ほんのちよつとの工夫でいるんなことができるなんて驚きました。</u> 」とか。なんかその、 <u>できないと思っただけど工夫することが大事</u> とか思ったりとか。で、あとは、わたしはS	障害者に対するこれまでの考えが覆される	障害者に対する先入観が変わる	障害者に対する認知

<p>選手の話聞いて今日から洗濯物とか手伝いたいです。」とか、「今日はS選手の話聞いて、友達が失敗したときは励ますことが大事だと思った。」<u>「車いすの選手かっこよかった。」</u>とか。「今日はありがとうございました<u>「車いすでもバスケができることが分かった。」</u>とか。もしかしたらやっぱりちっちゃい子たちの方が、「足がなかったらできない」っていう先入観があって、<u>「だけでもそれをうまくちの選手たちがひっくり返してもらってるから、僕たちも工夫すればできるんだとか、っていうのが今1年生のと見てると思うかな。でもやっぱり選手一人一人話の得意なテーマが違うからなあ</u></p>			
<p>Tさんにとって、どうい講演会がうまうまいったと思いますか？</p> <p>T氏:それすげえ難しい、ちょっと時間ちょうだい。……………まあそれってアンケート見ないとわかんないよね。体験会盛り上がる、話聞いて勉強になったっていうのは最低ライン。これ絶対なんだよね。子供たちが、<u>体験会の後に選手のところに来てパーっと交流してると、それは、ああ良かったんだと思うし。あと、もし授業参加してただ受けるだけって子は見ててなんとなくわかるから。</u></p>	<p>体験会後に選手と交流しに行く</p>	<p>選手との心理的障壁の解消</p>	<p>障害者に対する心理的障壁</p>

4) 質問項目の選定

文献調査とインタビュー調査によって抽出された構成概念から、質問項目の選定と内容的妥当性の検証を行った。内容的妥当性の検証には、スポーツ経営学を専門とする研究者(大学教員)2名、および大学院生7名でディスカッションを実施した。ディスカッションを開始する前には、メンバーに対して事業評価の研究におけるアウトカムの定義と概念の説明を行い、今回の研究目的を十分に把握してもらった。具体的には、「障害者スポーツ教育プログラムが参加者に与える影響や効果(アウトカム)」と捉えうる項目を選定するねらいについて共有した。ここでの検討を通じて、内容が重複する項目や今回の調査に適さないと判断された項目は除外し、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムとして加える必要があると判断された新規項目が追加された。

5) 結果のまとめと考察

まず、フィールドワークの実施によって、実際に障害者スポーツ教育プログラムの参加者の反応や表情から障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関する仮説を立てることができた。プログラムが始まる前には選手との距離感があった参加者が、プログラム終了後には選手に自ら近づいて話しかけるなどの場面があり、プログラムを介して障害者に対する抵抗感が低減する可能性が伺

えた。また、障害者スポーツについて全く知らなかった参加者が、プログラム終了後には「もっとやりたい」と発言するなど、障害者スポーツに対する興味関心が高まっている可能性が伺えた。先行研究の資料分析の結果、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関するキーワードが96項目抽出され、オンラインデータの資料分析によって、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関するキーワードが26項目抽出された。さらに、5名の障害者スポーツ教育プログラムの関係者に対するインタビュー調査から、アウトカムに関するキーワードが32項目と、合計で154項目のキーワードが抽出された。抽出された154項目は、前述の7名の研究者とのKJ法によって9つに分類され、それぞれ「多様性の受容」「障害者スポーツに対する行動意図」「障害者スポーツに対する感情」「障害者に対する心理的障壁」「障害に対する認知」「障害者スポーツに対する認知」「障害者に対する感情」「障害者に対する行動意図」という9つのラベルが付与された。その結果をもとに、スポーツ経営学を専門とする研究者とのディスカッションによって項目の選定を行った。

今回の研究では、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムに関する先行研究がほとんどないことを踏まえ、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムとして考えられる要素を網羅的に把握するため、キーワードを抽出する際にはアウトカムのワ

ーディングが類似しているものや意味合いが重複しているものも対象とした。結果、今回抽出された154項目のキーワードのうち、102項目が類似および重複する項目に該当しており、最終的な評価項目を選定する際には削除対象とした。類似および重複している項目を削除した後、「多様性の受容」と「障害に対する認知」のラベルに該当する項目を確認したところ、項目数がそれぞれ2項目と1項目しか残らなかったため、削除対象となった。また、インタビューデータからはほとんど得られなかった「障害者に対する感情」と「障害者スポーツに対する感情」の2つに関しても削除対象とした。この結果について、先行研究では障害者に対し「かわいそうだ」「暗い感じがする」「元気がない」という質問項目や、障害者スポーツに対し「つまらなさそう」「危険そうだ」「楽しそうだ」といった質問項目があった。しかしながら、調査当時の小中学生の実態として、東京オリンピック・パラリンピックの開催に伴いダイバーシティ教育や障害者スポーツに関する授業をすでに行っている学校が多く、障害者や障害者スポーツに対するイメージがすでにポジティブであることが考えられる。そのため、インタビュー対象者からは「障害者に対する感情」と「障害者スポーツに対する感情」の変化に関するキーワードが出なかったものと考えられる。

最終的に22項目からなる5つのラベル（「障害者に対する心理的障壁」「障害者に対する認知」「障害者に対する行動意図」「障害者スポーツに対する認知」）に縮約された。この5つのラベルは、さらに障害者に関するカテゴリー（「障害者に対する心理的障壁」「障害者に対する認知」「障害者に対する行動意図」）、そして障害者スポーツに関連するカテゴリー（「障害者スポーツに対する行動意図」「障害者スポーツに対する認知」）に2分された。採用された項目をもとに調査票を作成し、スポーツ経営学を専門とする教員2名とともにワーディングの修正を行った。

VI. 本調査

予備調査で作成した調査票を用いて、小中学生（小学5年生～中学3年生）を対象とした質問紙調査を2019年11月～12月の期間に行った。収集されたデータを用いて調査票の尺度項目を分析し、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム測定尺度の信頼性・妥当性を検証した。

1. 調査対象およびデータの収集

障害者スポーツ教育プログラムの主な対象者であり、作成した調査票の回答に支障がないと考えられる小学校5年生から中学校3年生を調査対象とした。データの収集については、障害者スポーツ教育プログラムを毎月複数回行っている3つの実施主体に依頼し、プログラム実施予定の学校に調査票を郵送した。障害者スポーツ教育プログラムを実施する学校に質問紙調査の協力依頼をしたところ、団体Aでは1校、団体Bでは2校、団体Cでは3校の計6校から調査の承諾が得られた。

2. 倫理的配慮

質問紙は無記名での記入とし、データは統計的処理を施した集団のデータとして公表する。質問紙には、「このアンケートで書いていただいたみなさまの情報は大切に保管し、研究活動にのみ使用します。」と記載し、協力者の不利益は生じないこと、回答は任意であること、途中中断の権利があることをアンケート実施前に説明した。さらに、対象校の担当教員に対し、本研究の趣旨目的を記載した文書を送付し、同意を得たのちに調査を実施した。

3. パラスポーツ教育プログラムの内容

今回、調査対象となった障害者スポーツ教育プログラムは、いずれも種目として車いすバスケットボールを採用し、50～60分程度の時間で主に車いすバスケットボールの体験や車いすバスケットボール選手の講演、車いすバスケットボールのデモンストレーションの観戦などのコンテンツを展開していた。実施主体ごとのプログラムの詳細は以下の表6～表8に示す通りである。

表6 プログラムの詳細(団体 A)

プログラム運営体制		
プログラム実施主体	団体 A	
人員構成	車いすバスケットボール選手 1 名、スタッフ 1 名	
プログラム詳細		
所要時間	プログラムコンテンツ	詳細
20 分	車いすバスケットボール選手の講演	パワーポイントを用いて車いすバスケットボール選手が自分のこれまでの人生のストーリーについて語る
10 分	車いすバスケットボール選手のデモンストレーション	車いす操作やシュートのデモンストレーションを行う
20 分	車いすバスケットボールの体験	10 数名の生徒さんが車いすバスケットボールの体験を行う

表7 プログラムの詳細(団体 B)

プログラム運営体制		
プログラム実施主体	団体 B	
人員構成	車いすバスケットボール選手 3~4 名、スタッフ 3~4 名	
プログラム詳細		
所要時間	プログラムコンテンツ	詳細
10 分	車いすバスケットボール選手の自己紹介	車いすバスケットボール選手一人一人があいさつを自己紹介をする
10 分	車いすバスケットボールクイズ	車いすバスケットボールのルールや、一般の車いすと競技用車いすの違いをクイズ形式で説明する
10 分	車いすバスケットボール選手のデモンストレーション	車いす操作やシュート、2 対 2 のデモンストレーションを行う
5 分	休憩	トイレ休憩を行う
30 分	車いすバスケットボールの体験	生徒さん全員が競技用車いすの乗車体験、車いすバスケットボールのミニゲームに参加する
10 分	車いすバスケットボール選手への質疑応答	生徒さんが選手を囲んで自由に質問する
5 分	写真撮影	生徒さんと車いすバスケットボール選手と一緒に写真撮影を行う

表8 プログラムの詳細(団体 C)

プログラム運営体制		
プログラム実施主体	団体 C	
人員構成	車いすバスケットボール選手 3~4 名、スタッフ 5~6 名	
プログラム詳細		
所要時間	プログラムコンテンツ	詳細
5 分	車いすバスケットボール選手の自己紹介	車いすバスケットボール選手一人一人があいさつを自己紹介をする
10 分	車いすバスケットボールクイズ	車いすバスケットボールのルールや、一般の車いすと競技用車いすの違いをクイズ形式で説明する
10 分	車いすバスケットボール選手のデモンストレーション	車いす操作やシュート、2 対 2 のデモンストレーションを行う
20 分	車いすバスケットボールの体験	生徒さん全員が競技用車いす乗車体験やシュート体験、ミニゲームを実施する
5 分	車いすバスケットボール選手への質疑応答	生徒さんが選手を囲んで自由に質問する

4. 調査項目

調査項目は、まず対象者の個人的属性に関する項目【学年・性別・障害のある近親者の存在・これまでの障害者スポーツとの関わり】を設定し、次に障害者スポーツプログラムに対する参加者評価の項目(19 項目)を設定した。そして、予備調査において選定した障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定する項目【障害者に関するアウトカム(12 項目)・障害者スポーツに関するアウトカム(10 項目)】を設定した。個人的属性を除く各項目の回答については、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの7段階リッカート形式で回答を求めた。そのうち、【障害者に関するアウトカム(12 項目)】と【障害者スポーツに関するアウトカム(10 項目)】の結果は本研究の目的である障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム尺度の作成に用い、残りのデータは別の研究において用いることとした。

5. 分析方法

本研究では、スポーツ及び経営学の分野で心理的尺度の開発を行った柿沼ら(2015)、高松・山口(2015)、醍醐ら(2015)の尺度作成の手順を参考に、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカム尺度の作成と信頼性・妥当性の検証を行った。分析には、IBM SPSS Statistics26 及び IBM SPSS Amos26 を用いた。分析の手続きとして、まず天井効果とフロア効果の検証、I-T 相関、G-P 分析によって項目分析を行なった。次に、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)によって下位尺度の構成を検討した。そして、探索的因子分析によって抽出された下位尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した。因子間の関連性の検討には、相関分析を実施し Pearson の積率相関係数を算出した。最後に、探索的因子分析によって得られた尺度構成のモデル適合度を検証するため、確認的因子分析を行った。モデルの評価には、モデル全体の評価とモデルの部分評価という2つの段階を踏んだ(小塩, 2018)。まず、モデル全体の評価については、 χ^2/df , GFI, AGFI, CFI, RMSEA が基準を満たし

ているか検討した。次に、モデルの部分評価については推定値と AVE(average variance extracted), CR(construct reliability)を算出し、構成概念妥当性と収束的妥当性及び弁別的妥当性、内的整合性を検証した。

6. 結果

1) サンプルの基本的属性

調査の結果、得られたデータの基本的属性を以下の表9に示した。調査票の配布数は6校合わせて 887 票で、回収したのは 802 票(回収率 90.4%)であった。そのうち、無回答の項目がある調査票を除き、有効回答数を 572 票(64.5%)とした。なお、収集したサンプルのうち、無作為に抽出した半数(286 票)を本研究で用い、残りの半分は本プログラムのアウトカム評価に関する研究で用いることとした(表 10)。本研究で用いる調査票のうち、さらに無作為に抽出した半分(143 票)を項目分析と探索的因子分析で用い、残り半分(143 票)を確認的因子分析にかけ、モデル適合度の検証に用いることとした。サンプルを分けた理由は、同じサンプルに異なる分析をすることによりサンプルの重複によるデータの依存性が懸念されるためである。MacCallum et al. (1999)は、同一サンプルを用いた場合には因子分析の結果と信頼性係数の間に相関があることを明らかにしており、データの依存性が生じることを指摘している。そのため、分析ごとにサンプルを分けたほうが結果をより正確に解釈できると判断し、尺度作成とアウトカム評価、さらには探索的因子分析と確認的因子分析においてサンプルを分けて分析することとした。同一の学校のサンプルを半分にした理由としては、類似の母集団のサンプルではないとデモグラフィックデータが偏る可能性があるためと判断したためである。学年に関しては中学 1 年生と小学 6 年生が多く、中学 3 年生と小学 5 年生は全体の 10%程度にあたる結果となった。男女比はほぼ同数で、身近に障害者がいると答えた者は全体の 15%程度であった。過去に障害者スポーツに関わったことのある者が半数以上おり、他の障害者スポーツプログラムに参加した者が思いのほか多いことがわかった。

表9 サンプルの基本的属性

属性	n	%
中学1年生	35	37.6
中学2年生	28	30.1
中学3年生	30	32.3
小学6年生	0	0
小学5年生	0	0
男	51	54.3
女	39	41.5
答えたくない	4	4.3

属性	n	%
中学1年生	47	57.5
中学2年生	35	42.5
中学3年生	0	0
小学6年生	0	0
小学5年生	0	0
男	46	56.1
女	33	40.2
答えたくない	3	3.7

属性	n	%
中学1年生	0	0
中学2年生	0	0
中学3年生	0	0
小学6年生	78	70.4
小学5年生	33	29.6
男	52	46.8
女	56	50.5
答えたくない	3	2.7

属性	n	%
いる	8	8.5
いない	55	58.5
わからない	28	29.8
答えたくない	2	2.1
記入漏れ	1	1.1

94

属性	n	%
いる	12	13.7
いない	54	67.1
わからない	15	18.0
答えたくない	1	1.2
記入漏れ	0	0.0
	82	

属性	n	%
いる	23	20.7
いない	55	49.5
わからない	30	27.0
答えたくない	2	1.8
記入漏れ	1	0.9
	111	

属性	n	%
1 回でも関わったことがある	33	35.1
複数回関わったことがある	1	1.1
これまでの関わりはない	60	63.8
記入漏れ	0	0.0
	94	

属性	n	%
1 回でも関わったことがある	30	36.6
複数回関わったことがある	18	22.0
これまでの関わりはない	33	40.2
記入漏れ	1	1.2
	82	

属性	n	%
1 回でも関わったことがある	41	36.9
複数回関わったことがある	27	24.3
これまでの関わりはない	37	33.3
記入漏れ	6	5.4
	111	

全体		
学年	n	%
中学 1 年生	82	28.7
中学 2 年生	63	22.0
中学 3 年生	30	10.5
小学 6 年生	78	27.3
小学 5 年生	33	11.5
全体	286	100
性別		
性別	n	%
男	149	52.1
女	128	85.9
答えたくない	10	7.8
身近な障害者の有無		
身近な障害者の有無	n	%
いる	43	15.0
いない	164	57.3
わからない	73	25.5
答えたくない	5	1.7
未記入	2	0.7
障害者スポーツとの関わり		
障害者スポーツとの関わり	n	%
1 回でも関わったことがある	104	36.4
複数回関わったことがある	46	16.1
これまでの関わりはない	130	45.5
未記入	7	2.4

表 10 データ収集の結果

データ収集の結果						
実施主体	団体 A	団体 B	団体 B	団体 C	団体 C	団体 C
調査日	2019 年 11 月 2 日	2019 年 11 月 13 日	2019 年 11 月 29 日	2019 年 12 月 4 日	2019 年 12 月 9 日	2019 年 12 月 19 日
対象者	中学 1-3 年生	中学 1 年生	中学 2 年生	小学 6 年生	小学 6 年生	小学 5 年生
調査票配布数	280 票	177 票	100 票	130 票	100 票	100 票
回収数(率)	266 票 (95%)	139 票 (79%)	91 票 (91%)	126 票 (97%)	90 票 (97%)	90 票 (90%)
有効回答数(率)	185 票 (70%)	93 票 (67%)	68 票 (68%)	91 票 (72%)	68 票 (76%)	67 票 (74%)

2) 項目分析

天井効果・フロア効果は、平均値±標準偏差が7以上または1以下を削除基準とした(柿沼ら, 2015)。その結果、障害者に関するアウトカム尺度(12項目)では天井効果に該当する項目が3項目あり、削除対象とした。障害者スポーツに関するアウトカム尺度では、天井効果に該当する項目が2項目あり、どちらも削除対象とした。フロア効果に該当

する項目は、障害者に関するアウトカム尺度、障害者スポーツに関するアウトカム尺度いずれも見当たらなかった。I-T(Item-Total)相関分析では、相関係数が0.3未満となっている項目と、1%水準で有意な相関が見られない項目を削除基準とした(柿沼ら, 2015)。結果、障害者に関するアウトカム尺度では3項目、障害者スポーツに関するアウトカム尺度では1項目が該当し、合計4項目を削除対象と

した.G-P(Good-Poor)分析では,1%水準で有意な相関が見られない項目を基準に削除対象としたが,いずれもすでに削除された項目であったため削除対象はなかった.最終的に,障害者に関するアウトカム尺度は6項目,障害者スポーツに関する

アウトカム尺度は8項目が残った.分析の結果は,障害者に関するアウトカム尺度と障害者スポーツに関するアウトカム尺度それぞれ以下の(表 11)と(表 12)に示す.

表 11 障害者に関するアウトカム尺度の項目分析の結果

採用	質問項目	平均値	標準偏差	天井効果 (AVE+SD)	フロア効果 (AVE-SD)	I-T 相関	I-T 分析 有意確率 (両側)	G-P 分析 有意確率 (両側)
1	障がい者は自分とはちがう世界で生きている	3.12	1.69	4.81	1.42	.25**	**	***
2	工夫をすれば障がい者にもできることがあると思う	6.26	1.02	7.28	5.24	.60**	***	***
3	障害があってもスポーツをたのしむことができると思う	6.32	1.11	7.42	5.21	.49**	***	***
○ 4	障がい者とはどう接したらいいのかわからない	4.52	1.53	6.05	2.99	.32**	***	**
5	障がい者は1人1人できることとできないことがちがうと思う	5.46	1.34	6.80	4.12	.04		
○ 6	障がい者は自分と似ている部分もあると思う	5.01	1.54	6.55	3.47	.48**	***	***
7	障がい者は人によって性格や個性がさまざまであると思う	6.12	1.01	7.13	5.11	.52**	***	***
○ 8	障がい者のふだんの生活について知りたい	4.99	1.50	6.48	3.49	.54**	***	***
○ 9	障がい者がふだんどのようなことに困っているのかわかる	4.23	1.60	5.83	2.62	.40**	***	***
10	障がい者はどの人も似たような意見や考えを持っていると思う	4.18	1.70	5.87	2.48	-.18*	*	
○ 11	障がい者には声をかけづらい	4.74	1.54	6.28	3.20	.32**	***	***
○ 12	街なかで困っている障がい者を見かけたら助けてたい	5.51	1.11	6.62	4.40	.54**	***	***

表 12 障害者スポーツに関するアウトカム尺度の項目分析の結果

採用	質問項目	平均値	標準偏差	天井効果 (AVE+SD)	フロア効果 (AVE-SD)	I-T 相関	I-T 分析 有意確率 (両側)	G-P 分析 有意確率 (両側)
1	障がい者スポーツはさまざまな人たちがたのしめるスポーツだと思う	6.18	0.94	7.12	5.24	.50**	***	***
○ 2	障がい者スポーツのことを家族や友人に紹介したい	4.95	1.47	6.42	3.49	.76**	***	***
○ 3	障がい者スポーツチームの練習を直接見に行きたい	4.65	1.57	6.22	3.09	.82**	***	***
○ 4	障がい者スポーツをやりたい	4.71	1.62	6.33	3.09	.77**	***	***
○ 5	障がい者スポーツの大会を直接見に行きたい	4.59	1.61	6.20	2.98	.86**	***	***
○ 6	障がい者スポーツの大会をテレビやインターネットの動画で見てみたい	4.61	1.64	6.25	2.96	.83**	***	***
○ 7	障がい者スポーツや選手についてSNS やインターネットで調べようと思う	4.19	1.53	5.72	2.66	.77**	***	***
8	障がい者スポーツは自分たちがふだん行うスポーツとはちがう特別なものだ	4.53	1.57	6.09	2.96	.01	*	
○ 9	障がい者スポーツを支えるボランティアになりたい	4.22	1.45	5.67	2.76	.64**	***	***
○ 10	障がい者スポーツはカッコいいスポーツだと思う	5.44	1.38	6.83	4.06	.68**	***	***

3) 探索的因子分析

項目分析の結果から採用された尺度項目の因子構造を把握するために、まずは主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数に関しては、固有値が1以上の因子数を採用し、累積寄与率や因子の解釈可能性を考慮して決定し、因子負荷量.40未満の項目や複数の因子に高い負荷量を示す項目を削除対象とした(高松・山口, 2015)。結果、障害者に関するアウトカ

ム尺度については6項目から1項目(障がい者がふだんのようなことに困っているのかわかる)が削除され、2因子5項目が抽出された(表 13)。累積寄与率は 67.1%であり、(出村ら, 2004)が基準値としている 60%-80%の範囲であった。障害者スポーツに関するアウトカム尺度については、8項目すべてが残り、1 因子構造となった(表 14)。累積寄与率は 69.0%であり、同じく基準の範囲内であった。

表 13 障害者に関するアウトカム尺度の探索的因子分析の結果

項目	因子負荷量
	F1
< F1 障害者スポーツに対する態度 > ($\alpha = .935$)	
障がい者スポーツの大会を直接見に行きたい	.916
障がい者スポーツの大会をテレビやインターネットの動画で見たい	.887
障がい者スポーツチームの練習を直接見に行きたい	.870
障がい者スポーツや選手について SNS やインターネットで調べようと思う	.797
障がい者スポーツのことを家族や友人に紹介したい	.790
障がい者スポーツをやりたい	.786
障がい者スポーツはカッコいいスポーツだと思う	.698
障がい者スポーツを支えるボランティアになりたい	.663

表 14 障害者スポーツに関するアウトカム尺度の探索的因子分析の結果

項目	因子負荷量	
	F1	F2
< F1 障害者に対する興味・関心 > ($\alpha = .723$)		
障がい者のふだんの生活について知りたい	.801	
街なかで困っている障がい者を見かけたら助けたい	.690	
障がい者は自分と似ている部分もあると思う	.544	
< F2 障害者に対する心理的障壁 > ($\alpha = .655$)		
障がい者には声をかけづらい		1.009
障がい者とはどう接したらいいのかわからない		.460

4) 確認的因子分析

探索的因子分析によって得られた因子構造のモデルが適合しているかを検証するため、確認的因子分析を行った(表 15)。モデルの適合度指標は χ^2 / df , GFI, AGFI, CFI, RMSEA を用いた(小塩, 2018)。障害者に関するアウトカム尺度については、 $\chi^2 / df = 2.248$, GFI = .974, AGFI = .904, CFI = 0.966, RMSEA = 0.093 であり、 χ^2

$/df$ (基準値 3.00)と GFI(基準値 .90), AGFI(基準値 .90), CFI(基準値 .90)に関しては基準値を満たしていたが、RMSEA(基準値 .08)に関してはやや基準値を上回る数値を示す結果となった。障害者スポーツに関するアウトカム尺度については、 $\chi^2 / df = 2.134$, GFI = .925, CFI = 0.925, RMSEA = 0.072 がすべて基準値を満たしていた。しかし、AGFI = .866 につ

いては基準値をわずかに満たさなかった。よって、一部の適合度指標では望ましい結果が得られなかったものの、ほとんどの適合度指標で基準値を満たす結果となったため、モデルの適合度は概ね良好であると判断した。なお、基準値については高松・山口(2015)と小塩(2017・2018)を参考に設定した。

続いて、尺度の構成概念妥当性の検証を行うため、パス係数の数値(推定値)と、標準化係数の推定値を算出した(表 16)(表 17)。結果、障害者に対する興味・関心因子と障害者に対する心理的

障壁の間のパスはどちらも 5%水準で有意な相関を示す結果となった。しかし、標準化推定値を見てみると、「障害者の普段の生活について知りたい(=.45)」と、「障害者は自分と似ている部分もあると思う(=.34)」の2つの項目のみにおいて低い数値を示す結果となった。しかし、モデルの適合度は良好であったため上記2項目はそのまま残すこととした。障害者スポーツに対する興味・関心因子の項目も含め、上記2項目以外の項目については、基準値を上回る結果となった。

表 15 モデル全体の評価

尺度	χ^2/df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
障害者に関するアウトカム尺度	2.248	.974	.904	.966	.093
障害者スポーツに関するアウトカム尺度	1.895	.946	.903	.983	.079

表 16 標準化推定値(障害者に関するアウトカム尺度)

項目	標準化推定値
障がい者のふだんの生活について知りたい	.451
街なかで困っている障がい者を見かけたら助けたい	.951
障がい者は自分と似ている部分もあると思う	.342
障がい者には声をかけづらい	.668
障がい者とはどう接したらいいのかわからない	1.008

表 17 標準化推定値(障害者スポーツに関するアウトカム尺度)

項目	標準化推定値
障がい者スポーツのことを家族や友人に紹介したい	.849
障がい者スポーツチームの練習を直接見に行きたい	.901
障がい者スポーツの大会をテレビやインターネットの動画で見たい	.890
障がい者スポーツや選手について SNS やインターネットで調べようと思う	.864
障がい者スポーツを支えるボランティアになりたい	.790
障がい者スポーツはカッコいいスポーツだと思う	.574
障がい者スポーツをやりたい	.724

次に、AVE を算出し収束の妥当性及び弁別的妥当性の検証を行った。そして、CR を算出し、収束性及び内的整合性を検証した。AVE を算出した結果、障害者に対する心理的障壁因子が(=.615)であり、障害者スポーツに対する興味・関心因子(=.540)については、基準値とされる.50 (Fornell & Larcker, 1981)を上回り、収束的妥当性が確認された。しかし、障害者に対する興味・関心因子については AVE が(=.471)と、わずかに基準値に達しなかった。信頼性を示す CR については、障害者に対す

る興味・関心因子が(=.723)、障害者に対する心理的障壁因子が(=.737)、障害者スポーツに対する興味・関心因子が(=.902)であり、基準値とされる.60(Bagozzi & Yi, 1988)をすべて上回る結果となった。よって、収束性及び内的整合性が示唆される結果となった。

VII. 結論

1. 結果のまとめ

本研究は、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定する尺度を作成すること、測定尺度の妥当性・信頼性を検討するという2つの目的のもと、2つのSTEPに分けて調査分析を行った。まず、測定尺度を作成するための調査分析を行った結果(STEP1)、最終的には22項目が残り、そのうち「障害者に関するアウトカム」と、「障害者スポーツに関するアウトカム」の大きく二つのグループに分類され、障害者に関するアウトカムが12項目、障害者スポーツに関するアウトカムが10項目という結果となった。

次に、作成した尺度の信頼性・妥当性を検討するための調査分析を行った結果(STEP2)、さらにいくつかの項目が削除され、障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定する信頼性・妥当性のある尺度が作成された。

2. 考察

STEP1の結果に関して、抽出された22項目のうち、先行研究で安井(2004)、藤田(2015)、角田ら(2018)が採用した調査項目と類似しているものはいくつか含まれていたが、本研究では独自の項目が抽出されたり、逆に先行研究で扱われている項目が抽出されない結果となった。本研究では、項目作成の際にプログラムを実際に運営し参加者と直接関わりをもつ者のインタビュー調査結果が含まれていたことから、プログラム実施後すぐに実感できる直接的なアウトカムに関する項目や、よりプログラム参加者の実態に沿った内容の項目が抽出されたのではないかと考えられる。

一方で、STEP2により削除された項目に関しては、小中学生にとっては曖昧で答えづらい質問項目になっていたことや、規範意識からほとんどの回答者がポジティブな回答をしたことにより回答に偏りがでてしまったこと原因であると考えられる。今後は、調査前に中高生にとって回答がしやすい項目になっているか試験的に小中学生数名に調査票を回答してもらったり、小中学校の先生に意見をもらうなど、回答しづらい項目がないか事前に確認したうえで調査を行うなどの対応が不可欠であるといえる。

3. 実践的示唆

これまでの障害者スポーツプログラムの研究では、障害者スポーツ教育プログラムに着目し、新たな評価尺度を作成する試みはほとんど見当たらない。また、これまでの障害者スポーツプログラムの研究では、障害者に対する態度やイメージなどの心理的尺度を用いてその成果を明らかにしてきた。本研究においては、従来使われていた障害者に

対する態度やイメージなどの心理的尺度に加え、プログラム評価の視点を取り入れ、インタビュー調査によって得られた実施者の期待するプログラムのアウトカムについての項目も追加している。本研究の対象である障害者スポーツ教育プログラムにも同様のことが言える。よって、本研究で作成した尺度は、現在国の施策や企業のCSR活動として、社会的な目的のもとおこなわれている障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを測定するための新たな尺度として利活用できる可能性がある。

4. 研究の限界と課題

本研究の限界と課題として、今回の研究で抽出したアウトカムは主に障害者および障害者スポーツに対するイメージや態度に関するものであったが、障害という枠を超え、多様性に対する理解や、他者への思いやりなど、そのほかにも考えられるアウトカムまで網羅することができなかった。今後、レビューする先行研究の幅を広げることや、参加者に対するヒアリングを行うなど、より多角的な視点で障害者スポーツ教育プログラムのアウトカムを捉えていく必要があると考えられる。また、今回作成した尺度のモデル適合度において一部の数値が基準を満たさないという結果となった。この結果に関して、項目分析や探索的因子分析によりモデルの修正を何度か行ったが、本研究の結果で示しているモデルよりも数値が改善することはなかった。今度、本尺度の信頼性・妥当性をより高めていく上では分析対象となるサンプル数を増やすことや、尺度項目の追加・修正などの改善が求められると考える。

参考文献

- Bagozzi, R. & Yi, Y. (1988) On the Evaluation of Structural Equation Models. *Journal of the Academy of Marketing Sciences*, 16, 74-94
- Daniel Tindall (2013) Creating disability awareness through sport: exploring the participation, attitudes and perceptions of post-primary female students in Ireland, *Irish Educational Studies*, 32:4, 457-475
- 醍醐笑部, 木村和彦, 作野誠一 (2015) バレエDVD鑑賞前後における態度・行動意図の変容—大学バレエクラスを対象として 12, 19-37
- 出村慎一, 西嶋尚彦, 佐藤進, 長澤吉則 (2004) 健康・スポーツ科学のためのSPSSによる多変量解析入門
- Fornell, C., & Larcker, D. F. (1981). Structural equation models with unobservable variables and measurement error: Algebra and statistics. *JMR, Journal of Marketing Research (Pre-1986)*, 18(000003), 382

- ・ 藤田紀昭(2015)知的障害者スポーツ大会へのボランティア参加による障害者に対する意識変化に関する研究,7, 9-16
- ・ 柿沼直美,飯田苗恵,大澤真奈美,原美弥子,齋藤基(2015)訪問看護ステーションにおける安定的な経営管理のための自己評価尺度」の開発,日本看護科学会誌, 2015, 35 巻, p. 1-9
- ・ 角田憲治, 大石由起子, 永瀬開,藤田久美(2018)大学生における障害者スポーツの学習が肢体不自由者のイメージおよび障害者スポーツのイメージに与える影響—体験型授業と講義型授業の比較—. 山口県立大学学術情報, 11, 51-58
- ・ Karen K. Myers & John G. Oetzel (2003) Exploring the dimensions of organizational assimilation: Creating and validating a measure, *Communication Quarterly*, 51(4), 438-457
- ・ 川喜田二郎(1967)発想法 : 創造性開発のために,中央公論社
- ・ Kyle F. Paradis, Laura J. Misener, Gayle McPherson, David McGillivray & David Legg (2017) Examining the impact of integrated and non-integrated parasport events on volunteer attitudes towards disability, *Sport in Society*, 20(11), 1724-1744
- ・ MacCallum, R. C., Widaman, K. F., Zhang, S., & Hong, S. (1999) Sample size in factor analysis. *Psychological Methods*, 4(1), 84-99.
- ・ 文部科学省(2016).『オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて 最終報告』
- ・ 文部科学省『交流及び共同学習は本当に共生社会に貢献しているの?～アンケート調査の結果より(抜粋)～』, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1298938.htm (最終閲覧 2022 年 1 月 30 日)
- ・ 森田正信(2019)教育行政における EBPM の取組状況について, *教育行財政研究*,46, 25-30.
- ・ 三好皓一(2008)評価論を学ぶ人のために,世界思想社
- ・ 宮本聡介,宇井美代子(2014)質問紙調査と心理測定尺度-計画から実施・解析まで-,サイエンス社
- ・ 内閣府(2002)「障害者基本計画」, <https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonkikaku.html> (最終閲覧 2021 年 1 月 30 日)
- ・ 内閣府(2017)障害者に関する世論調査, <https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-shougai/index.html> (最終閲覧 2022 年 1 月 30 日)
- ・ 小野聡子,徳田克己,水野智美,西館有沙(2015)障害者スポーツの視聴が青少年の障害観に与える影響: 障害理解教育の観点から. *障害理解研究*, 16, 21-29
- ・ 小塩真司(2018)SPSS と Amos による心理・調査データ解析[第3版]—因子分析・共分散構造分析まで,東京図書株式会社
- ・ 小塩真司(2017)研究をブラッシュアップする SPSS と Amos による心理・調査データ解析, 東京図書株式会社
- ・ ピーター・H・ロッシ, マーク・W・リップセイ, ハワード・E・フリーマン著, 大島巖, 平岡公一, 森俊夫, 元永拓郎訳(2005)プログラム評価の理論と方法 : システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド,日本論評社
- ・ 清水紀宏(2002)八代勉・中村平 編著,体育・スポーツ経営学講義,大修館書店,p127-137
- ・ 佐藤郁哉(2006)フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう,新曜社
- ・ Scullion, P. A . (1999)‘Disability ‘in a Nursing Curriculum. *Disability & Society*, 14(4), 539-559
- ・ 津々木晶子,氏橋祐太,白坂成功,松崎英吾,前野隆司(2015)多様性適応力評価尺度の開発と適用の試み-日本ブラインドサッカー協会のワークショップを対象として-, *スポーツ産業学研究*, 25(2),277-291.
- ・ 高松祥平,山口泰雄(2015)総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度作成の試み , *生涯スポーツ学研究*, 12(1), 13-23
- ・ 植木章三(2007)大学における障害者スポーツ関連教育と地域貢献との融合 : "パロリンピック"の企画・運営を通じて, 5(1),72-75
- ・ 内田若希,大谷まや (2013)障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討. *障害者スポーツ科学*,11(1),33-41
- ・ Weiner,B.,Perry,R.P.,&Mognusson,J.(1988).An attribution analysis of reaction to stigmas.*Journal of Personality and Social Psychology*,55,738-748
- ・ 和久田佳代,石塚和重(2004)全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響,聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要 3, 69-78
- ・ 矢島佳子,渡正,平賀慧,永田悠祐,中島裕子(2021)東京都と千葉県における パラリンピック教育の実態と今後の課題 —小学校・中学校・特別支援学校教員へのアンケート調査結果より—,パラリンピック研究会紀要, 15,1-45

- ・ 安井友康(2004)車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響. 障害者スポーツ科学, 2(1), 25-30